

2021年度支部委員会発足にあたって

少しずつ労働環境の前進を

けやき



No. 620
2021.9.1

京大職組
文学部支部

新支部長あいさつ

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ

文学部教職員の皆様、本年度、文学部支部の支部長を引き受けることになりましたワダ・マルシアーノです。三年前に赴任したばかりなので、お顔は拝見したことがあっても言葉を交わしたことの少ない同僚も多いかと思えます。文学研究科に新設された国際連携文化越境専攻の専攻長を務めており、学術専門分野は映画・メディア研究です。新支部長として皆様の意見や要望をできるだけ掘り上げ、われわれの職場をより働きやすい環境へ改善することに務めたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

二〇二一年度の文学部支部では、以前から継続する「時間雇用教職員の雇用制度見直し」といった難問に取り組むと同時に、二〇一九年度の支部長であられた芦名定道先生が提唱した「できることから着実に」という Motto を継承しながら、少しずつ労働環境の前進を目指したいと思います。

組合力の養成

八月十三日付けの『職員組合ニュース』で報告されたように、西洋近代哲学史専修の大河内泰樹先生が中央執行委員長に就任されま

した。執行部と文学部支部とが今まで以上に結びつき、諸問題解決に共に取り組む機会が増すだろうと嬉しい思いがいたします。大河内氏が記しているように、「大学の大学らしさを担保することができるのは実は組合ではないか」、「大学の始まりはまさに知識を求め人たちの組合」であったといった指摘からも明らかのように、一人では解決できない労働問題を共有しながら解決に向かう、それが大学という空間の中でできるのは組合以外にはありません。組合員だけではなく、文学部内の全ての教職員の皆さんの力をお借りできないでしょうか。宜しくお願いいたします。

組織制度や考え方の改善

大学での職域ワクチン接種がこの夏で一通り行き渡りました。しかし、コロナ禍第五波を迎え、八月二〇日から京都では再び緊急事態宣言が発令されています。やっと対面授業をやれると喜んでいた矢先の困難再来です。キャンパスライフを取り戻せる、普通の生活ができる、友達に会えると楽しみにしていた学生たちに、われわれ教職員は今こそ何を伝えるべきでしょうか。

二〇一八年度の文学部支部長を務められた高嶋航先生の言葉を思い出します。「管理の強化はなにも考えない人間を作ります。面従腹背の人間を作ります。責任を負わない人間を作ります。大学で自治・自由を学ばずして、いまだどこでそれを学べるのでしょうか。」考える学生を育てることは、大学にとって最も大切な仕事だと私も同感です。また同時に、それは教職員にも当てはまるのではないのでしょうか。われわれが考え、そして語り合うことのできる環境を持たずして、どうやって考える

事の意義を学生たちに伝えられるのでしょうか。

京都大学に限りませんが、日本の大学の多くでは、教員・職員が共に働かされ過ぎていないでしょうか。上乘せ仕事をせざるを得ない者には、それなりの代価を支払ったり、別の仕事の負担を軽減したりする必要はないでしょうか。政府の条例である「働き方改革」を超えた、京大独自の学風・組織制度改革が今こそ求められています。ジェンダー格差の是正も、改革が必要なもう一つの項目です。現実的にジェンダー格差が大きい組織の一つとして、積極的な改善を京大でまず行えないでしょうか。そのための新しいアイデアを皆さんと一緒に模索して行きたいと思えます。

至らぬ事も多いと思いますが、これから一年間宜しくお願いします。文学部支部の活動に対し、今まで以上にご理解・ご協力をお願いいたします。より多くの方が積極的に参加できる文学部支部にしたいと考えます。

2021年度支部委員会メンバー

支部長	ミツヨ・ワダ・マルシアーノ
副支部長	成田 健太郎 杉山 卓史
支部委員	福村 輝美 似内 奏子
ビラ配布	事務支部委員全員

よろしくお祈りします

